

第29回全国小学生作文コンクール

「わたしたちのまちのおまわりさん」

受賞名：読売新聞社賞（高学年の部）

タイトル：警察官も一人の人間だから……

氏名：手塚 氷菜音（テヅカ ヒナネ）

小学校名：埼玉県 行田市立西小学校 五年

車に乗っている時に、パトカーとすれ違うことがあります。そんな時、悪いことをしていないのに、なぜか『ドキッ、ビクッ』とします。そして、警察署や交番の前に立っている警察官を見ると「こわそうだなあ」と思います。それをお母さんに言うと「警察官の仕事はいつも危険ととなり合わせなんだよ。」と言って色々教えてくれました。

お母さんの父親（わたしのおじいちゃん）は、何年か前に退職したけれど、警察官でした。お母さんが小学生の頃は、お祭りの日や元旦は必ず警備の仕事で家にいなかったそうです。家族で出かける日に、急に仕事で呼び出されることもあって、休日にお父さんが家にいる友だちを「いいなあ」と思ったりしたそうです。

でも、そう思っていたのは良くなかったと気づいた時があったそうです。お母さんは、若い時に警察で「じゅん職警察官の本」作製のために、資料集めの仕事を一年間だけしていました。昔の新聞を調べたり、本に載せるためにお墓の写真を撮りに行ったりしたそうです。「その仕事を通して、警察官の仕事はいつも危険なんだと分かった。じゅん職した警察官一人一人にそれぞれ家族がいる。自分がその家族の立場になることもありえる。父親の仕事に対して心配だなと感じるようになった。」とっていました。

お母さんの話を聞いてから、パトカーに乗っている警察官、交番に立っている警察官を見ると「あの警察官にも奥さんや子供がいて、家で帰りを待っているかもしれない。」と思うようになりました。見た目がこわそうに見える警察官でも、家に帰ったらふつうのお父さんかもしれないと想像すると「ドキッ、ビクッ」としなくなりました。

一人一人の警察官が、わたしたちが安全に暮らせるように守ってくれています。大地震や台風などの災害では、警察官は自分の家族よりも地域の人たちのために働かなくてはいけない時もあります。最近「警察官が助けた人、たいほした人が新型コロナウイルスに感染していることもある」とニュースでやっていました。感染がこわいから助けない、たいほさない、というわけにはいきません。

わたしは、警察官に守られていることが当たり前だと思ってはいけません。警察官はみんなを守ることが仕事だけど、ロボットじゃなくて一人の人間だということをもっと考えることが大切です。自分が事故に合わないよう気をつける、危ない場所には近づかない、感染症にかからないような生活をする、それだけでも警察官の危険や負担を減らすことができます。

「一人一人が気をつけて生活することで、事故や事件が減って、わたしたちも警察官も安全で、笑顔で過ごせるまちにしていけたらいいな。」と思います。